様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４１２８

研究課題名（和文）認知症概念の変容・浸透が支援実践に及ぼす効果に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study on the Effects of the Changing Concept of Dementia and its Penetration into Society on Supportive Practices

研究代表者
井口　高志（Iguchi, Takashi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：４０４３２０２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、20世紀後半から、認知症に関する新しい考え方やそれに基づく実践が、どのような展開を見せてきたかを、実践者たちへのインタビューや、活動への参与観察、認知症当事者の著作・発信などをデータに記述した。そうした作業から、社会の認知症の理解と包摂が、疾患としての理解、本人の「思い」の配慮、当事者の声の登場という三つの流れで展開してきたこと、および、それぞれの流れ同士の関係を明らかにした。また、障害学理論等を参照して、そうした流れについての理論的評価を試みた。さらに、21世紀以降、介護や医療を越えて展開してきた認知症をめぐる活動において重要視されている地域という場の含意を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、認知症の理解と包摂をめぐる現代的展開を、これまでの歴史的文脈、隣接する障害をめぐる社会学の議論の文脈の中に位置付けることで、認知症をめぐる近年の歴史をより見通しよく整理したことと、進行する病いや老いに伴う障害などの理解と包摂に関する社会学理論の展開に貢献したことである。また、こうした現在の歴史的・文脈的記述によって、認知症をめぐる実践や運動が目標設定やこれまでの実践の評価をしていく上で、参照軸となるという社会的意義も持っている。

研究成果の概要（英文）：This research project clarified how new ideas about dementia and practices based on them have developed since the late 20th century, using data from interviews with practitioners, participatory observation in activities, and writings and presentation of people with dementia. As a result, the study clarified that the understanding of dementia and its inclusion in society have developed in three streams: understanding in relation to the causative disease, consideration of the "thoughts" of people with dementia, and the emergence of the voices of people with dementia, as well as the relationship between these three streams. I also attempted to theoretically evaluate these trends in light of theories such as disability studies. Furthermore, I clarified the significance of the importance of the community in activities related to dementia, which have developed beyond the topics of caregiving and medical care since the 21st century.

研究分野：社会学、医療社会学、福祉社会学、ケア論

キーワード：認知症　進行する病　老い　理解　包摂と排除　ケア　当事者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

20 世紀末から、認知症が脳の原因疾患に起因する症状群であることや、周囲が本人の思いに配慮したケアを行うことの重要性などの認知症に関する「正しい知識（＝理念）」が社会的に強調されてきた。また、早期診断の重要性も強調され、実際に認知症と診断された本人も自らの経験を語るようになってきている。そうした知識の成立と現実化の中で現れてきた、本人重視のケアや実践に関する研究は、認知症の人のより良い生の実現という理念を実践と共有して、その実現のための技術的サポートのニュアンスの強い実践的研究の色彩を持っている。他方、新しい理念の実現を目指す潮流の中、認知症概念の浸透が、家族介護や専門的介護における相互作用に何をもたらすかを実証的に明らかにしようとする社会学的研究もなされてきた（木下衆 2019『家族はなぜ介護してしまうのか』世界思想社）。これらの研究は、「理念」を無謬とせず対象化しようとする姿勢において、批判的・反省的な研究と言え、1990 年代から欧米でなされてきている認知症の人へのラベリングと無力化を分析する研究や、同様の関心に基づく日本での先駆的研究（天田城介 2003『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』多賀出版）を、現代日本社会の文脈に合わせて精緻化し継ぐものである。

このように、申請者の拠って立つディシプリンでもある社会学的な認知症研究は、現場で理念的実践が試みられていく中で、その動きが現実に対して持つ効果や意味を丁寧に明らかにしていく特徴を持っている。研究代表者自身もこれまで家族介護者による介護や若年認知症の人たちを支援するケア実践の分析をそうした観点で行ってきた（井口高志 2007『認知症家族介護を生きる』東信堂、井口高志 2012「医療の論理が認知症ケアにもたらすもの：あるデイサービスの試みを事例にした探索的研究」『福祉社会学研究』9 号: 121-141）。本研究も基本的にはそうした研究を引き継ぐものである。

ただし、これまでの社会学的研究は、診断やその後の介護など、いわば医療・福祉システム内での出来事に焦点を当てたものがほとんどであった。しかし、21 世紀に入ってから現在に至るまで、認知症の問題は医療・福祉を越えて展開し、それが大きなムーブメントとなってきている。具体的には、地域づくりや当事者運動といった形をなしてきているのである。また、同時に、医療・福祉システム内の認知症概念も変動しており、そのことへの注目もやはり重要である。2010 年代には、認知症の原因疾患に関する専門的知識の浸透が急速に進み、疾患ごとの独自のケアや医療のあり方が、当事者を巻き込んで展開していった。この動きは「認知症の医療化」が、より複雑な様相を示すようになってきた状況とも言える。

以上のように、認知症概念の変容と浸透は、大きくいうと、医療・福祉を越えた領域と、医療・福祉の内部での両方において見ることができる。認知症概念の変容と浸透を探求する社会学研究は、そうした二つの流れの双方を視野に収めて展開していく必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、上述したような二つの流れとして一旦は整理できる近年の認知症概念の変化のあり様を精緻に記述し、既存の障害や病いをめぐる社会理論を参照しながら、その変化が認知症の本人や介護者の社会的包摂へとつながりうるのか否かを議論することにある。認知症 dementia 概念は、現在、世界的な国際会議や政府の成長戦略、そして、地域のまちづくり課題の中核にも置かれるなど医学的な症候群概念を超えて、社会システムの構想とも関連付けて論じられてきている。こうした概念の内容と流通範囲の劇的な変化のあり様、および現実への影響を、概念の変化の潮流の中で生まれてきた当事者・支援者たちの先駆的実践に注目して検討することで、概念分析研究や医療社会学の医療化論に示唆を与え、かつ認知症支援実践に反省的な視点を提示する研究を目指す。

３．研究の方法

本研究では、新たに生まれてきた認知症に関する活動実践への参与観察や、そこへの参加者たちへのインタビュー調査、そうした活動の中で生まれる文章や講演会などのテクストの収集を行なった。これらの作業で収集したデータを分析しつつ、関連する研究者集団の中で発表し議論をしながら、成果を主に研究論文や著作の形で発表していった。特に、方法論的に意識したのは社会学の専門的な場でのみ成果を発表して議論するのではなく、認知症に関わる現場等での発表を重視することである。具体的には、認知症の当事者運動的な集まりや、認知症ケアを実践する学会などにおける報告・発表を研究活動として行いながら意見をもらったり、議論を行ったりすることで、成果発表とデータ収集・現場へのフィードバックを研究プロセスの中で同時に行なうことを意識した。

４．研究成果

本研究の中心的な研究成果は、2020 年に発表した単著『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』（晃洋書房）の出版である。本書では、20 世紀後半からの、認知症に関する新しい考え方やそれに基づく実践が、どのような展開を見せて

きたかを、実践者たちへのインタビューや、活動への参与観察、認知症当事者の著作・発信などをデータにして記述した。そうした作業から、社会の認知症の理解と包摂が、疾患としての理解、本人の「思い」の配慮、当事者の声の登場という三つの流れで展開してきたことを明らかにし（第1 章）、またその三つの潮流が実際の現場でのケア実践や当事者運動的な実践において、どのような影響を及ぼし合っているのかを、特に現場でのジレンマに注目しつつ、各章において明らかにした。また、最終的には、特に障害学におけるインペアメント（損傷）とディスアビリティ（不利益）の関係に関する議論を参照して、進行するという特徴を持つ認知症の包摂と排除についての現状の理論的評価、および未来において何が重要になってくるのかの見通しを示すことを試みた。

以上の単著の執筆過程、および執筆後においては、看護学研究者と共同での報告（2018 年）、哲学者が集まる研究会での報告（2018 年）、認知症ケア学会（2019 年のシンポジウム登壇、2021 年の東北ブロックでの特別講演）や多文化間精神医学会での報告（2019 年）、台湾大学の医療社会学者、環境社会学者等が参加した国際ワークショップでの報告（2019 年、2021 年）、老年精神医学会の学会誌への寄稿（2021 年）など、社会学や日本社会を越えた研究者や実践者との研究交流を行い、研究内容をブラッシュアップすると共に、成果をそうした領域に伝えていくことができた。実際に、そうした成果を踏まえて、研究の最終年度となる 2021 年には日本医療政策機構の「健康長寿時代の介護システムの構築」のタスクフォースメンバーとして、財政学・心理学などの多領域の研究者、企業の実務者・医師などのアカデミア以外のセクターの実践者たちと議論を行う活動を行うことができた。

また、その他の研究内容としては、特に単著において展開した議論の発展として、認知症をめぐる地域での活動の意義や、地域という場における認知症の人の承認に関する議論を展開していき、何本かの論稿を執筆した。さらに、認知症ケア領域の研究から得られた知見をより広いケア・支援の議論につなげていくために、編集委員をつとめている領域横断的な雑誌『支援』で、書評やエッセイなどの形での発信を行なった。

以上のような形で成果を発表した本研究の第一の意義は、単著として形にできたような学術的な内容のものである。認知症の理解と包摂をめぐる現代的展開を、これまでの歴史的文脈、隣接する障害をめぐる社会学の議論の文脈の中に位置付けることで、認知症をめぐる近年の歴史をより見通しよく整理し、進行する病いや老いに伴う障害などの理解と包摂に関する社会学理論の展開に貢献した。さらに、同時に、第二に、本研究は社会的・実践的な意義も示すことができた。認知症をめぐる現在の歴史的・文脈的な記述とそれに基づく理論的評価という作業によって、認知症をめぐる実践・運動・政策が、未来の目標設定やこれまでの実践の評価をしていく上で、一定の参照軸を示すことができたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井口高志	４．巻 112(12)
２．論文標題 認知症ケアにおける「地域社会」：介護・介助の範囲をいかに見るべきか?（特集 地域社会と介護・介助）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 都市問題	６．最初と最後の頁 50,58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井口高志	４．巻 11
２．論文標題 新幹線はいちばんはやい?	５．発行年 2021年
３．雑誌名 支援	６．最初と最後の頁 128,134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井口高志	４．巻 32(2)
２．論文標題 認知症との共生の社会学：予防と備えの対比から考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 老年精神医学雑誌	６．最初と最後の頁 215,221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井口高志	４．巻 65(2)
２．論文標題 書評：木下衆『家族はなぜ介護してしまうのか：認知症の社会学』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ソシオロジ	６．最初と最後の頁 126,134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井口高志	4．巻 10
2．論文標題 ケアできない「原罪」：育児・介護をめぐる煩悶とこの10年	5．発行年 2020年
3．雑誌名 支援	6．最初と最後の頁 4,22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井口高志	4．巻 29（2）
2．論文標題 認知症ケアにおける地域の意義 ： 認知症の人の一貫性の維持と緩和に注目して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 27,34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井口高志	4．巻 44
2．論文標題 ポスト診断時代における認知症の社会学の課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 家族研究年報	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Iguchi Takashi	4．巻 26
2．論文標題 How Has Image of People with Dementia Emerged in Japan?: An Analysis of TV Documantary Program in the NHK Data Archives	5．発行年 2019年
3．雑誌名 奈良女子大学社会学論集	6．最初と最後の頁 84, 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井口高志	４．巻 8
２．論文標題 認知症当事者本が拓くもの―2017年の著作群を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 支援	６．最初と最後の頁 212,224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Iguchi takashi
２．発表標題 “Rethinking the Conflict between Prevention and Preparedness: Toward a Sociology of Living with Dementia”
３．学会等名 UT-NTU Sociology Forum 2021, November（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井口高志
２．発表標題 認知症社会の希望はいかにひらかれるのか: 認知症の予防・備え・共生をめぐる議論から考える
３．学会等名 日本認知症ケア学会2021年度東北ブロック大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井口 高志
２．発表標題 認知症ケア・医療の社会学的観察と実践
３．学会等名 第20回日本認知症ケア学会（京都国際会館）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 井口高志
２．発表標題 「拡散する家族介護」への支援を考える
３．学会等名 第26回多文化間精神医学会（龍谷大学深草キャンパス）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Iguchi
２．発表標題 Dementia in Japan: How it Has Been Understood and How this Paradigm is Changing
３．学会等名 UTokyo-NTU Joint Conference, Care and Migration in Japan and Taiwan, in The University of Tokyo Hongo campus.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 井口高志・九津見雅美
２．発表標題 レビー小体型認知症（DLB）における「適切な対応」と「進行」の理解をめぐって－DLB の人の介護者と医療者との質疑応答のデータからの検討－
３．学会等名 第44回日本保健医療社会学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 井口高志
２．発表標題 認知症経験の変容と相互行為：新しい認知症ケア時代の社会学
３．学会等名 家族問題研究学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 井口高志
２．発表標題 「新しい認知症ケア」が家族介護にもたらすもの―あるデイサービスの本人の「思い」の聞き取り実践を事例に考える
３．学会等名 第22回一橋哲学フォーラム
４．発表年 2017年

１．発表者名 九津見雅美・加藤泰子・井口高志
２．発表標題 レビー小体型認知症患者の家族が捉える患者の症状と生活への影響
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 加藤泰子・九津見雅美・井口高志
２．発表標題 在宅で暮らすレビー小体型認知症の人の支援と課題
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 井口高志	４．発行年 2021年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 360
３．書名 「認知症の人による〈当事者宣言〉は何に対抗し誰を包摂するのか?: 分断への抗いと認知症カテゴリーの行方」樫田美雄・小川伸彦編『〈当事者宣言〉の社会学 : 言葉とカテゴリー』: 202-226.	

１．著者名 井口高志	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 284
３．書名 「認知症新時代の福祉社会学的課題：ケアと承認をめぐって」上村泰裕・金成垣・米澤旦編『福祉社会学のフロンティア：福祉国家・社会政策・ケアをめぐる想像力』:175-190.	

１．著者名 井口高志	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 288
３．書名 認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求	

１．著者名 武川正吾、森川美絵、井口高志、菊地英明	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 218
３．書名 よくわかる福祉社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関